一般講演

1 *Latrodectus hasseltii* (セアカゴケグモ) の個体数動態とその生息域の節足動物種との関係 ○吉田永祥、岩上泰雄、内野清子、田中智之(堺市衛研)、吉田政弘(大阪府公衛研)、幸形 聡(ホームサービスK.K) Comparative studies on the population dynamics of *Latrodectus hasseltii* and other Arthropods. Hisa-yoshi Y oshida, Yasuo Iwagami, Kiyoko Uchino, Tomoyuki Tanaka, Masahiro Yoshida and Satoshi Kougata

我々は1995年より防除を目的としたセアカゴケグモの生息要因を継続・調査している。今回大阪南部の公園と緑地の排水溝に生息するクモ類とその餌となり得る節足動物について2000年7月と12月に調査を行った。クモ類については卵囊を含めた巣材ごとを回収した。節足動物については10(W)×6(D)×1(H)cmのプラスチック製粘着トラップを調査排水溝底に設置し1週間後に回収した。セアカゴケグモは7月の駆除5ヶ月後の12月には駆除前より個体数は増加し他のクモに比べ高い復元率を示した。トラップで捕獲された節足動物は7月では12目56種が確認され、個体数では膜翅目(アリ類)が最も多かった。12月の寒冷期でも12目59種が確認され、その種構成には7月と大きな変化はみられなかったが、個体数はトビムシ目が最も多かった。クモ類とトラップで捕獲された節足動物との関係はセアカゴケグモが捕獲された節足動物の総数と有意に相関し、月別でみると7月はオカダンゴムシ、12月はヒメトビムシと有意に相関した。しかしながらセアカゴケグモ以外のクモは捕獲された節足動物数と相関を示さなかった。以上からセアカゴケグモの個体数動態は他種のクモに比べて餌に対する依存度が大きいものと考えられ、このクモの繁殖は餌が豊富な場所を優先すると思われる。

3 マダニ刺症および病原媒介の可能性について 及川陽三郎(金沢医大・医動物) Studies on human tick-bites and the possibility of the pathogen of tick born disease intermediation. Yosaburo Oikawa (Department of Medical Zoology, Kanazawa Medical University).

本邦におけるマダニ刺症については、山口(1994)により集計され、919件についての報告がなされているが、その後全国的かつ全マダニに包括的な報告はなされていない。そこで演者は、CD-ROM版医学中央雑誌の1995-2001年版にてマダニ刺症について検索し、その引用文献からの検索などと合わせて587症例を見出し、データベース化した。これらの地理的分布には人為的と考えられる大きな偏りが認められ、また、マダニの刺咬を受けても受診しない例や受診しても特に症例報告されない例、あるいはマダニ等のキーワードで拾えない症例等の存在を考えると、その実態を把握することの困難さが改めて実感された。マダニの処置法では、本人による除去を除けば、周囲の皮膚片ごと切除例とピンセットなどによる除去例はほぼ同等だった。マダニ媒介性疾患との関連では、マダニ刺咬例の約1割にライム病様症候が続発していたが、紅斑熱ではマダニ刺症と1対1の対応で議論できるような症例を検索することはできなかった。このデータベースは、公開する予定である。

2 比較的狭い地域におけるクサギカメムシの飛来分布 渡辺 護(富山県衛生研究所) Flight distribution of *Halyomorpha halys* in limited areas. Mamoru Watanabe

クサギカメムシは越冬のため家屋へ秋季に飛来、集団で部屋内に侵入して悪臭を放出する不快な昆虫である。被害地域の住民はカメムシの飛来が多い家と、少ない家があると言う。そこで、「カメムシの飛来が少ない家」の存在が確認できれば、最も基本的に永続的な被害阻止法の確立が考えられる。

そこで、富山県中新川郡立山町の2地域の合計17棟において、飛来するクサギを1996年から本年まで観察した。飛来の最も多い10月上旬中旬の13~14時に各家屋の壁などに飛来したクサギを方位別に数を記録し、10m²当りに換算して比較した。その結果、「風土記の丘」では明らかに毎年クサギの飛来数が少ない家屋が2棟あった。「千寿ヶ原」では少ない家屋が6棟、多い家屋が3棟観察された。飛来が少ない家屋はスギ林などに囲まれる特徴があり、一方、飛来数が多い家屋は河川に近く、周囲が開けている特徴がみられた。このことは、クサギにははっきりと家屋が認識されるか、否かが飛来数の多寡を決める大きな要因と示唆された。

4 ライム病 *Borrelia* の疫学調査における新たな展開 高田伸弘(福井医大) New findings in survey of Lyme *Borrelia*. N. Takada

我国のライム病症例と主要媒介種シュルツエマダニは北海道・東北・中部地方まで広く見られる。一方、我々の調査で、本種は北陸・近畿・中国・四国・九州北半部まで主要山岳地帯で見出され、人刺症もよく知られた。しかし、本種個体群や幼若虫の宿主野鼠は *Borrelia* 陰性であったため、南西日本で有意な媒介はないと考えられた。ところが、九州北半部の追跡調査で本種から *B. garinii* が分離でき、再考が求められることになった。一方、福井県(渡鳥ルート)で、北アジア共通型の *B. garinii* が見出されて大陸→日本の拡散経路が実証された。更に、沖縄の野鼠から欧州共通種の *B. valaisiana* (東アジア調査でも見た)を確認したことから、*Borrelia* 拡散に関しては既知の北アジアルートのほか東アジアルートの意義も増すことになった。その他、ネパール共通の *B. tanukii*、東アジアの新種 *B. sinica* 保有のヤマトマダニの問題など、それらの病原性を含めて未解明の部分は多い。

共同研究者:石畝 史(福井県衛研)・増沢俊幸(静岡県大)・藤田弘己(大原研究所)・矢野泰弘(福井医大)